

# 圓福寺報

卷頭法話

## こころのバリアフリー

圓福寺報 第四十六号  
 平成十八年五月一日発行  
 発行者 臨濟宗妙心寺派 圓福寺  
 千葉市稲毛区穴川町三七五 TEL (二五二) 九一八一  
<http://www.bnet.co.jp/enpukuji/>  
 E-mail: enpukuji@come.bnet.co.jp



ハートプラス  
マーク



ほじょ犬マーク



盲人を表示する  
国際マーク



身体障害者標識  
(障害者マーク)



聴覚障害者  
シンボルマーク  
(耳マーク)



オストメイト  
マーク



聴覚障害を示す  
国際マーク



障害者のための  
国際マーク

バリアフリー  
 幼稚園園舎の工事がようやく終  
 わりました。建築に当たって、体  
 の不自由な人のために玄関には車  
 椅子用スロープ、トイレも車椅子  
 で入れるものを一ヶ所は作りなさ  
 いと指導されました。

以前、実際に幼稚園に車椅子の  
 子が出てきていたことがありま  
 した。その頃は古い園舎でしたの  
 で、段差はあるしトイレは幼児用  
 で、バリアだらけの建物でした。  
 でも、その子の車椅子が見える  
 と、同じクラスの子が我先にと

### 目次

卷頭法話

「こころのバリアフリー」

第十回四国あるき遍路の旅

「懺悔の男一号二号」

道下 森

第十一回四国あるき遍路ご案内

お寺の情報公開ページ その十五

穴川風土記

「寺から半里」

くわが町かど探索

熊倉 浩

お寺と和尚の日録抄

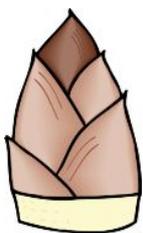
幼稚園

創立五十周年記念式典と落慶式

土曜会「俳句会」

開板新調

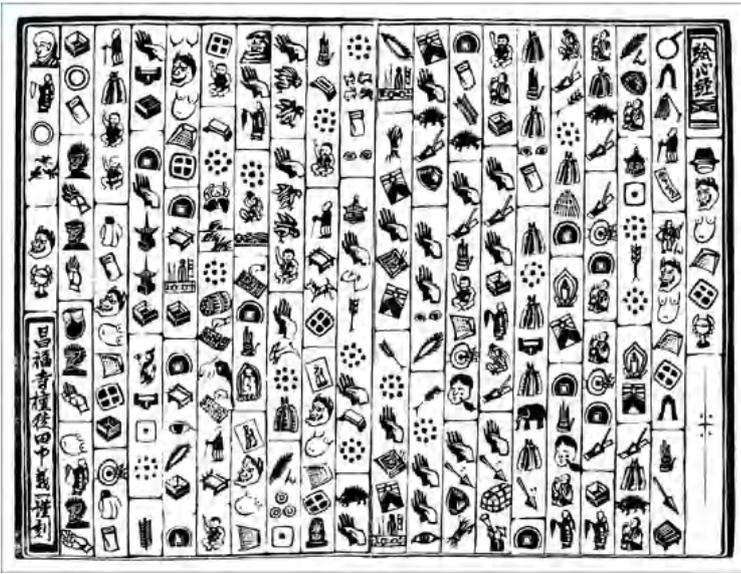
編集後記



16 16 16 15 14 11 10 9 5 1 頁



から羽黒山とか山岳宗教の聖地などに登るときには、「六根清浄ろくこんじやうじやう」、六根は、般若心経中の「色声香味触法」を認識する「眼耳鼻舌身意」ですが、これを清浄に、山に登ることで清浄にしましょう、とらわれないで常に更の状態にしましょうというんです。



絵心経

宵越しよいごしの怒り

東京女子医大の創設者で、吉岡弥生さんという方がいらっしゃいました。明治四年の生まれで、男子学生に混じって苦勞をして「医術開業試験」に二十二歳で合格し、日本で二十七番目の女医になった方です。その吉岡弥生さんが「人のモノサシ」という文を書いていらっしゃいます。

江戸っ子氣質を表すことばに、「宵越しの銭は持たねえ」というのがありますが、吉岡さんはこう言います。

「わたしは、『宵越しの怒り』とか、『宵越しの苦勞』はしないことにつとめておりまして、他の人が自分自身のモノサシで人をはかることはご勝手で、それについてとやかかくいうのは好みません。」

吉岡さんが育った時代

は、おそらく女に学問なんていらなにか、男女七歳にして席を同じゅうせずとか言われた時代だったでしょう。そんな時代に、男子学生に混じって医学を勉強する吉岡さんは、いろんなことを言われたにちがいありません。そんな社会のとらわれた見方を打ち破って女医さんを養成する学校を創設された吉岡さんは、とらわれたころのことを「宵越しの怒り」「宵越しの苦勞」とおっしゃったのではないのでしょうか。「人のモノサシ」もまた、その人なりの経験や知識に基づいたとらわれといえるでしょう。となると、無色声香味触法と同じく絶対的ではありません。そこで、モノサシは確かなも





まずと、腹も立たず、憤慨もいたしません。何事も淡々と片付けて、心中に何のわだか

のではありません、宵越しですから、次の日はまた新たなモノサシで測らなければいけないのです。  
吉岡さんは続けて言います。  
「人と交際を続けていく以上、ひとからいろいろと不平やら、悪口めいたことを言われるのは避けられません。殊に何か事があった場合は、必ずあの人がああ言ったとか、こう言ったとか、きつとうるさいことになって参りますが、私は決して人から言われたことを気にかけていいにしています。  
あの人ならそれくらいのこととは言うだろう、その人ならあれくらいのことと言うだろうと、それぞれの立場に身をおきかえて考え直しますと、腹も立たず、憤慨もいたしません。何事も淡々と片付けて、心中に何のわだか



まりも残しません。」  
これはなににも人との間ばかりのことで

はありません。自分自身のことでも、愚痴をいったり、不平を言ったり、なんて力がないんだ、なんて馬鹿なんだと思うことがたくさんあります。それは生きていくうえでどうしようもないことだと思いますが、それにとらわれないところを持たず、腹も立たず、憤慨することもなくなると思います。  
また、自分の体のことにしても、白髪が増えた、はげてきた、目が悪くなった。若い頃はこんなじゃなかったと、若い頃というのにとらわれてしまいがちです。山登りの楽しみも、頂上を目指すことだけにとらわれてしまえば、下りはつまらないものになります。下りが、下りにも登りにない楽しみが

あるといえます。とすれば、年齢を重ねていく中にこそその楽しみや味わいを、「若い頃」にとらわれなければ見つけていくことができるでしょう。



このころのバリアフリー  
そのとらわれないということ  
は、「自由」ということばにつながります。その自由は、好き勝手とかいう意味ではなく、「自ずから由る」ということです。経験や知識などに由るのでもなく、そんなモノサシを使わずに、六根がまっ更な状態でわき興ってくる、あるいはとつきにでてくる行いやことばを「自由」といい、これが「このころのバリアフリー」です。  
宵越しのとらわれに振り回されずに、このころをバリアフリーにして日々自由に生きていけるものです。

# 第十回四国あるき遍路の旅



平成18年2月25日(土)～27日(月)

六十六番雲辺寺から七十五番善通寺まで

足掛け六年、第十回でようやく香川県に足を踏み入れます。総勢二十二名の大所帯となりました。八十八ヶ所中、最後の難所といわれる六十六番雲辺寺を過ぎれば、瀬戸内沿いの平坦な道と侮っていたわけではないのですが、雲辺寺からの下りは結構応えました。

## 懺悔の男一号二号

道下 森

「この遍路の旅はさ、懺悔なんだよね、おれの場合」

雲辺寺に向かうバスの中で、メンバーの一人がいった。ずいぶんおおげさなことをいう人だな、とぼくは思った。滝に打たれにいくわけじゃあるまいし、遍路といったって、たかがお寺参りじゃないか。

まわりを見ても、その人以外はみな遠足気分だ。気の合った者同士で隣り合い、ぺちやくちややっている。もっともこの「四国あるき遍路の旅」の主催者である和尚さんとそのお弟子さんだけは、笑みを見せつつも厳粛な面持ちをたもっているが。

バスが雲辺寺口に到着した。

よっしゃっ、というふう立ち上がり、総勢二十二人のメンバーはバスを降りた。そこは深い谷の中だった。これからめざす四国八十八箇所第六十六番雲辺寺は、標高九一メートルの山頂にある。

だしぬけに和尚さんが歩き出した。その後ろをお弟子さんがつづいた。勝手を知るこの旅の常連たちはあたりまえの顔つきで二人の後を追った。おいおいマジかよ、と初参加のぼくは心の中で抗議し



雲辺寺に向かう山中の遍路道

た。ちよつと待って  
くれよ。そんなに急  
ぐなって。せめて靴  
紐くらいしげらせて  
くれよ。

歩き出してすぐに  
登山道に入った。前  
をいく人の尻がちよ  
うど目の位置に見え  
るほどの急な上り  
だ。もう誰の口から  
も雑談の声は聞こえ  
てこない。

列はしだいにまば  
らになった。健脚自  
慢の者たちと、体力に自信がない  
者たちとの差が見る見る開いてい  
く。ぼくは疲れを押し隠し、必死  
の思いで歩きつづけた。高齢の人  
たちが愚痴もこぼさずにがんばっ  
ているのだ。若造の自分が先にへ  
ばるわけにはいかない。

四国遍路最後の難所、「雲辺寺」にて



二時間ほど  
で二十二人の  
メンバーすべ  
てが山頂の雲  
辺寺に到着し  
た。最後にた  
どりついたの  
は、遍路は懺  
悔だ、と口に  
していたあの  
男だった。疲  
労困憊の顔は  
げっそりとし  
ていて、汗ま  
みれの身体か  
らは湯気が立っている。

全員で本堂と大師堂の前で般若  
心経をとなえ、各々賽銭を投げて  
参拝した。  
お参りを終えると、一行は山道  
を下りはじめた。  
初日のお参りはこうして無事終

わった。

二日目は冷たい雨になった。

レインウェアを着こみ、八時す  
ぎに宿を出た。本日の行程は第六  
十七番札所の大興寺から第七十番  
の本山寺までだ。前日のように山  
登りではないが、その分歩く距離  
は二十五キロ前後とかなり長い。

雨にけぶる農村を歩きながら、  
ぼくは何人かの人と話をした。そ  
のうちの一人がこんな話をしてく  
れた。

「私は前回のあるき遍路からの参  
加なんです。本当は参加する気な  
なんてなかったんですけどね、たま  
たまもらった参加者募集の案内に  
『香園寺』の名前があったんで、  
それで参加する気になったんで  
す」

香園寺は四国八十八箇所第六  
十一番の札所で、子安大師として

二日目の朝、雨の中を大興寺に向かう。



も名高い寺だ。お遍路さんとはべつに全国から子宝にめぐまれない人たちがお参りにやってくる。「亡くなった主人が若い頃その寺をおとずれたんですよ。私たちの子をささがるようになって」  
はじめてもらった寺報に、その寺の名がのっていた。不思議な縁

を感じ、それならば、と参加する気になった。はじめは不安だったが、こうして寺の行事に参加することで元気が出たと、その人はいった。

そういう話は昨夜の酒の席でもいくつか出た。みんな遍路の旅をはじめ寺の行事や手伝いなどによつて救われた、元気が出た、といていた。

考えてみれば、この遍路の旅は主催が寺だから、メンバーのほとんどがたいせつな人を亡くした経験を持っていることになる。みんな悲しみを背負って生きているのだ。ぼくは父を亡くした。五年前の春のことだ。悲しさはなかった。むしろ、父が生きている間に何も成し遂げられなかったという自責の念の方が大きかった。それは今もなおつづいている。死んだ父を思うた

び、中途半端な今の自分が恥ずかしくなる。

ふと、「懺悔」という言葉が脳裏をかすめた。

ぼくは振り返った。

今日も「懺悔の男」は最後尾を必死の形相で歩いている。

かれもまた、誰かたいせつな人を亡くしたのだろうか。かれがいう懺悔とは、その人に対する償いなのか。

大興寺についた。  
メンバーは釣鐘の屋根の下に



ようやく大興寺に到着。山門をくぐる。

ザックを下ろし、本堂に向かった。般若心経が、やみそいでやまない雨の中に、冷え冷えと響いた。

雨は夕方には上がった。

長い坂道を、ぼくらは歩いていく。全員くたくただ。だがあと少しで宿につく。全員荒い息を引きずりながらも、棒切れのような身体を前へ前へと運んでいる。

列はまばらだった。先頭と最後尾の差は一キロ以上ある。ぼくは速度をゆるめ、最後尾を歩く「懺悔の男」のわきについた。

財田川の堤防を本山寺へと歩を進める。



「大丈夫ですか？」

ああ、とかれは頷いた。だがその顔はこうも語っていた。どうしてそんなことを訊く。おれはへっちゃらだ。少しばかり疲れたがまだまだ歩けるぞ。

すごい根性だ、とぼくは敬意をこらした。たしかに他のメンバーに比べて体力は劣ってはいるが、その分、何が何でも歩きとおしてやる、という強い意思がこの男にはある。これは山道をトップで歩く健脚に匹敵するでかい武器だ。「前回の遍路だったかな、すごい難所だし、ひいひいって歩いた

んだ。よっぽどリタイアして車拾おうかと思っただけだね、結局歩ききった。その寺の門の壁に書いてあった文章がさ、心にきたねえ」

「何て書いてあつたんです？」

かれはは映画の役者ばりにたっぷりと間を取り、そしていった。

「人生即遍路」

最終日の朝がきた。

八時すぎ、二十二人は宿の玄関先に集合した。

この日の行程は七十一番の弥谷寺から七十五番の善通寺までの五カ所のお参りだ。その後金比羅山神社をおとずれ、帰途の飛行機に乗る。歩く距離は約八キロ。昨日の三分の一の距離だ。たいしたこねえなあ、という頼もしい声があちこちから聞こえてくる。

和尚さんが歩き出した。その後

三日目、朝一番に弥谷寺の長い石段がお出迎え。



ろをお弟子さんがつづいた。メンバーが二人を追う。三日目にしてこの旅に慣れたばかりも軽快な足取りで遍路道を歩き出した。  
弥谷寺までの道は急な石段だった。大師堂まで三百段、本堂にくにはさらに石段を上っていくという。  
不意に風が山道を吹き抜けた。森の竹が揺れてこすれ合い、高い音をたてた。  
「もくもくと歩いていると、ああいう音が、何か意味ありげに聴こ



竹林の遍路道。「竹に声有り」

えるのよねえ」  
「そーいやあ、この弥谷山は『死者の靈魂が行く山』っていわれてるらしいよ」

そんな会話が耳に入り、ぼくはぞつとした。さつき風が吹いたとき、一瞬死んだ父の声が聞こえたような気がしたからだ。  
「懺悔か……」  
ぼくは振り返った。  
今日も「懺悔の男」は、列の最後尾を必死の形相で歩いていた。

### 参加者募集！ 第11回

## 日本あるき遍路の旅



◆日程（あくまで予定）  
十一月二十三日（祝）

飛行機で、高松空港へ。空港リムジンで琴平駅乗換え金蔵寺駅下車。ここからは徒歩。七十六番・七十七番・七十八番まで参拝。宇多津周辺にて宿泊。

十一月二十四日（金）

朝から歩きで、八十一番まで。お昼は「讃岐うどん」。坂出周辺にて宿泊。

十一月二十五日（土）

この日も朝から歩き。八十二番と八十三番を参拝予定。歩く距離は、約十七キロ。参拝後、高松空港から帰路につく。

◆募集人数 二十名くらい

◆参加費 五〜六万円くらいを予定しています。

◆申込 お寺までお早め。



## 寺から半里

くわが町かど探索く

地図を広げ圓福寺にコンパスをあてる。二kmは昔の里程でいう半里である。北は宮野木ジャンクション、南は千葉公園が範圍となる。東をたどるとみつわ台か。西は千葉街道で黒砂を包み込む。これから寺を発ち道筋の幾つかを探索したいと思う。

### 「穴川野」と穴川神社

あなかわの

江戸期寛保の頃から「穴川野」と呼ばれた広大な原野は、千葉町・寒川村・登戸村・黒砂村(以上佐倉藩領)、稲毛村・小中台村・園生村(以上旗本知行地) などの入会地いりあいちで村々が共同利用する「秣場」まぐさばであった。ここは明治二十二年黒砂村が千葉町に編入されるまで「黒砂村字穴川」であった。穴川橋あたりが村境という。大正五年の地割では「千葉町大字千葉字穴川」となっている。大正十年の市制で

「千葉市大字千葉」となったが「穴川町」が誕生するのは昭和十一年まで待たねばならない。

文政七年(一八二

四) 黒砂村の田村吉衛門(宮野木村能勢氏の出)

が「穴川野」の開墾を佐倉藩主堀田相模守正睦さがみのかみまさよしに

願い出て許され入植が始まる。吉衛門は藩主

から開発の功を賞せられそのお返しに村人が

石尊神社を建立した。祭神は鳥石楠船命とりのかみふねのみこと(農耕・天候の神)といわれ

る。藩主相模守をも祭神としてここに合祀した。もと穴川町十七番

地にあったが戦時中軍部の要請(陸軍戦車学校設置)で昭和十七

年に「道祖神社」に移動させられ現在の穴川神社となる。同じ社殿の



穴川神社

駄が奉納されている。

### 歴史の道「江戸道」

市内から宮野木に通ずる道(国道一二六・県道七二)は古くは「江戸道」といわれ長作・実籾を経て舟橋(現船橋)へと向かっている。旅人は成田詣での帰り客と一緒に舟橋から海路江戸へ向かったに違

左側が「道祖神社」(旅・交通の守護神八衢彦命(やちまたひこのみこと))、右が「石尊神社」で珍しい形をしている。鳥居脇に由来記の石柱がある。かつて道祖神社には巨大な草鞋わらじがあったが今は草履ぞうりと下



梵天塚

いない。海岸寄りを通る「房総往還」の裏道でもあった。

「江戸道」は歴史の道である。沿道では多くの歴史的モニュメントと遭遇できる。出羽三山信仰の盛んな土地柄で、羽黒山・月山・湯殿山へ参詣したお礼に記念碑（供養塔）を建立する。江戸期から始まったこの信仰は北総一円に今も根強く生きているのである。何代にもわたりお寺や神社の境内、または村境に塚を作り碑を建て記念とする。それが「梵天塚」(地域により呼称は様々)である。近くは千葉トヨペット穴川店裏にその塚はある。「元治元年・同行九人碑」など四基が

立っている。歩を進めると庚申塔、馬頭観音、道祖神など数知れず遇うことだろう。

### 国道一二六号を南下する

穴川商店街(県道七二号)を抜け国道一二六号と交差するところに旧消防署穴川支署があった。何処からでも目につく望楼はその役目が終わり住宅地の隅に地上数メートルを残すのみである。

右(西側)は学園と団地のまち轟町である。戦時は軍の施設で埋まっていた。「軍靴の音高らかに軍列が轟くが如く行進する」さまから轟町とした。戦中戦後塗炭の苦境を経験した多くの市民の思いや如何に？

天台駅を過ぎると左(東側)に作草部公園がある。陸軍歩兵学校跡で奥に中央児童相談所、脇には大



作草部交番の奥に公孫樹の老木が見える。「気球連隊」の営門跡である。今次の戦争では

師堂が祀られている。園内にある「平和の礎・陸軍歩兵学校跡」の碑は平和を訴えている。ここから天台・千草台・萩台の一带は歩兵学校の演習地で古地図には射撃場が幾つも載っている。

この町名の由来も聞いてまた驚く。大正二年第一回卒業式に行幸来校した大正天皇が演習の様子を天覧した。日本の伝統(?)か、全国無数に天皇や皇太子の「御野立所」があるがここも例外ではない。敗戦で陸軍が瓦解、平和が到来し軍用地は市民に戻されたが、「天覧台」とは恐れ多いので町名を「天台」に決めたというのである。



既に時代遅れ、如何ほどの役に立ったであろうか  
「気球」の格納庫は一棟だけ残り、ヤックスの隣に倉庫会社が使用している。交番

の次の道（気球連隊格納庫）「作草部神社」である。もと「貴布禰神社」といった。隣接して都賀公園・都賀小学校がある。市に合併されるまでここは千葉郡都賀村であった。さらには三枝郷（さいしききょう）に比定されている古い集落で作草部本村となる。村中にある「貴船山正善院」は貴布禰神社と深い関係にあったと考えられる。

交番の向側には道標を兼ねた「百万遍塔」(享和元酉年銘(一八〇

一)がある。(右ハながのま村よなもと道) (左ハそんのふ村小中台道)と読める。(ながのま)は「長沼」、(よなもと)は「米本」(八千代市)であろう。この塔は「なわしばり塔」とも呼ばれてその民間信仰が残っている。

作草部交差点南西の角に三匹の猿を踏まえて立つ「青面金剛像の庚申塔」は市内最古という。その右奥は曹洞宗宗胤寺であり境内に千葉宗胤(千葉頼胤の嫡子・九州千葉氏の祖)の墓とされる「千葉宋胤五輪塔」(市指定文化財)がある。競輪場の裏を下ると千葉公園に出る。「鉄道第一連隊」の鉄道敷設



庚申塔

演習の地であった。園内の随所に残るコンクリートの巨大な塊は当時を髣髴とさせる。綿打池はかつて蛍が飛びかっていたが今は「大賀蓮」と冬場飛来する水禽で有名である。池の南端には弁才天を祀る嚴島神社があり弁天町の由来となっている。

来た道に戻り斎藤輪業前を経済大学の通りに入る。大日寺には「千葉氏十六代の墓」(市指定文化財)が整然と並んでいる。鎌倉・室町時代の五輪塔で美術史的価値が大変高いという。創建は天平宝字元年(七五七)というから古い古い。千葉寺に次いで古い寺である。大日寺の斜め前が来迎寺。門を入ると千葉氏胤（うじたね）以下七基の「追善供養碑」(市指定文化財)がある。この二ヶ寺とも市の中心部にあったが戦災を受けここに移った。

平成十八年上半年お寺と和尚の記録抄

1月1日	新春ご祈禱
1日～3日	修正会
13日	幼稚園、もちつき
18日	妙心寺派東京教区役員会 於恵比寿 月例役員会
22日	社会保険センター、「写経」講座
28日	花園会新年会
2月1日	幼稚園、バザー「くすのきまつり」 社会保険センター、「写経」講座 月例役員会
3日	幼稚園、節分
4日	土曜会「春の句会」 写経会
5日	幼稚園、涅槃会
6日	千葉県幼稚園協会稲毛ブロック会
8日	幼稚園会計監査
9日	轟町中学校職場体験
18日	幼稚園創立五十周年記念式典、祝賀会
25日～27日	第十回四国あるき遍路の旅
28日	ご詠歌練習日
3月1日	社会保険センター、「写経」講座 月例役員会
3日	写経会
5日	写経会
5日～6日	埼玉平林寺、僧堂開単百周年記念法要

12日	彼岸会法要
16日	幼稚園、卒園式
20日	根岸円光寺彼岸会法話
23日	土曜会・彼岸法話会
24日	取手長禅寺彼岸会法要出頭
25日～27日	冬の寺子屋 in 苗場
28日	ご詠歌練習日 写経会
4月2日	社会保険センター、「写経」講座
5日	月例役員会
7日	幼稚園、入園式
11日	土曜会、「植林をしよう」
15日	取手長禅寺観音まつり出頭
18日	社会保険センター、「写経」講座
19日	

▽毎週木曜日午後六時～ 木曜坐禅会  
坐禅三十分二回、終わって茶話。無料。初心者歓迎。

▽毎月第三土曜日午後六時～ 土曜会  
お寺とあなたを結ぶ自由空間。会費二千元。

▽毎月最終火曜日午後四時～ ご詠歌練習

▽毎月第一日曜日午後一時半～三時半 写経会  
「般若心経」の写経。見やすい大ききの字体です。  
正座できない人のために、イスとテーブルも用意。  
一期五回(事前申込制)。会費三千元。

穴川花園幼稚園

創立五十周年記念式典と新園舎落慶式

二月十八日(土)、幼稚園の創立五十周年記念式典と新園舎落慶式が行われました。在園児二百十余名はじめ、来賓・幼稚園関係・



卒園生・保護者など四百七十名もの方々がお祝いに来園してくださいました。二階ホールにあふれんばかりのお祝いムードとなりました。

創立五十周年にあたり、卒園生保護者が五十周年記念事業を企画運営する委員会を立ち上げ、二年前から準備を進めていた集大成の日でした。

式典は、とかく大人の行事になりがちですが、子どもたち中心のものにといいことで、「幼稚園五十歳のお誕生会」という形で進められ、子どもたちによりくす玉割りや未来へのメッセージを書いた



紙ヒコーキなど、ころのこもった式典となりました。

また、この日のために作られた記念誌やDVD、愛唱歌も、大人のためではなく、子どもたちが楽しめるもの、そして子どもたちへのメッセージが込められたものとなっております。帰りいただきました。

式典に先立っての新園舎落慶式では、在園児からお祝いの品として送られた玄関ホールに飾られるステンドグラスのおしゃかさまの開眼供養も行われました。

後日、玄関ホールに飾られ、毎朝毎日子どもたちを見守ってくれています。

# 土曜会俳句会

二月四日

独演と成りて久しき節分会

笹倉 邦康

豆を撒く声無き家の連なりて

齋藤加代子

信濃路の旅の終わりや露の味噌

稲田 陽英



開板

## 開板新調

本堂西の縁側に面して吊り下げられている分厚い櫨の板があります。これは、「開板」といって、禅寺の時を知らせるための道具の一つです。圓福寺では、毎週木曜日の坐禅会が始まる時に打ち鳴らされています。

夕方、木槌で打ち鳴らされる音は、園舎にも跳ね返り、本堂内はもとより、境内中に響き渡り、いよいよ坐禅がはじまるぞと気が引き締まる思いがします。

あるときから、やけに音が悪くなりました。今日、開板を叩いている人はへたくそだなと思っていたら、割れかけていました。割れかけた開板の裏を見ると、平成二年十一月新添と書かれてあり、約十六年毎週木曜日に叩かれていたわけです。

このたび、新調をいたしました。前のものより立派な材で、いい音を出しています。開板に書かれている字は、坐禅会に参加されている書家の齋藤加代子さんに書いていただきました。これから、二十年以上、坐禅会の度に打ち鳴らされていきます。

## 編集後記

幼稚園の創立五十周年式典もあり、いつも以上にあわただしい一月から三月でした。

昨年は忙しさにかまけて、寺報も二回しか発行できずに後悔ばかりでした。今年は何とか、年四回の目標をクリアしたいとがんばりました。

幸いに、四国へんろの感想文を道下さん、「寺から半里」を熊倉さんが書いてくださり、いつもより以上に充実した誌面になりました。道下さんは文筆家を目指しているだけあって、素晴らしい文章でした。次回の遍路でも、感想をお願いしたいと思っています。熊倉さんは、自らの足で集めた資料の裏づけで、読む者の興味を呼び起こし、納得させてくれ、続きが楽しみです。

「次の号が楽しみ」、なんていう寺報になれば最高ですが、後は編集の腕次第といわれると、いささか心もとない編集子です。発行部数八〇〇にもなっています。玉稿に負けないように、編集に務めてまいります。